

## サロンでの気づき

サロンを訪問させて頂き、気づいたこと、聞いたことなど、お伝えしたいと思います。何かお役に立てれば嬉しいです。

本当に寒い日が続きますね。

先日の大寒波の日、広島も大雪になりました。当社の若い女性社員が小さい雪だるまをつくりて営業車のボンネットにこっそりと置いていたずらをしていました。近所の家の前では子供達がお父さんと一緒に大きな雪だるまをつくってはしゃいでいました。

そして、夕方に訪問したお店の前には情けない顔をした雪だるまがいました。朝はとても元気な顔をしていたそうです。寒い一日でした

たが、雪だるまのほのぼのとした顔が心を温めてくれました。暖かい春が待ち遠しいですね。



さて、先日開幕し、連日熱いドラマが繰り広げられているソチオリンピック。

時差は5時間、深夜の放送ながら頑張って見ていましたが、終わるのが4時頃になり寝不足になってしまって、どうしてもライブで見たい競技は、一度寝て目覚ましで起きるようにしています。

オリンピックを観る度に思うのですが、本当に厳しい世界ですね。

4年間、血のにじむような努力や苦労を重ねてきて、結果ができるのは、種目によっては、ほんの一瞬の出来事なわけです。当然、やり直しも効きません。だからこそ見る人に感動を与えるのだと思います。



私が一番感動したのは、7度目のオリンピック挑戦にして、ようやく悲願を達成した葛西選手です。8年前に出場した



トリノオリンピックの前に、

『彊(つと)めて息(や)まず』。好きですね、そういう言葉は。僕の好きな「継続は力なり」という言葉にも通じるものでしょう。

その言葉に少しでも近づけるように、僕はこれまで努力を続けてきました。

その間にいろんな不運にも見舞われましたが、おかげで精神力、忍耐力もついて、金メダルへの思いを途切れさせずにここまでくることができました。』と言っています。

この時からさらに8年間努力をし続けてこられたんですね。ただ、銀メダルをとった直後のインタビューで「金メダルという次の目標に向かって頑張ります」という言葉には、さすがにびっくりしましたね。

「彊(つと)めて息(や)まず」の意味ですが、

「天行は健なり君子は自ら彊(つと)めて息(や)まず」天の運行は一瞬も休まず、止まることがない。日月の運動も春夏秋冬のめぐりも、すべてそうである。気分が乗るとか乗らないとか、暑いとか寒いとか、都合があるとかないとかで滞ったりはしない。肃々とただひたすらに運行する。

この天地の大徳の現れである人間もまた、そうでなければならない。環境がどうだろうと条件がなんだろうと、天の運行のように、自ら彊めて息まず与えられた命をひたすらに生きる。

それが命の本質であり、命を躍動させて生きることなのである。

これは天が人間に託した根源的メッセージであると思う。

一方、残念な結果に終わったフィギュアスケートの浅田真央選手でしたが、浅田真央選手を育てたコーチ、山田満知子さんは浅田真央選手が15歳で出場することができなかったトリノオリンピックが終わった年の4月にこんな事を言っておられます。



「五輪に出てくる選手なんてみんな天才ですよ。その天才たちがさらに天才的に努力をして、やっとメダルに手が届くかどうか。そういう厳しい世界です。

世界の頂点に立てるのは天才の中の超天才だけ。

そりや私も2番より1番のほうがいいですよ。

でも、たとえ5番でも、

みんなから

「あの子、いい子だったね」

「あの人の演技って素敵だったね」

と言われるスケーターがいいなと私は思います。

だってジャネット・リンだって3位ですよ。誰も1位の人なんて覚えちゃいない(笑)。

彼女のスケートのいろいろなシーンに人間性が出て、それがいつまでも私たちの心に残っているんです。

(42年前の札幌オリンピックをテレビで見た方しかわかりませんね)

だから私はジャンプができないとか、 спинが下手とか、そういうことではまず怒らない。

礼儀とか躾のほうが多いかな。

反抗期の時、生意気だったり、先生にパンみたいな態度でいる子には「ちょっと待ったあ！」と。

「私はあなたより年上で、しかも先生でしょう。いまの受け答えはないでしょう」とはっきり言います。要するに生き方の注意のほうが多いですね。

みどりはハートの強さと優しさが混ざった演技をするスケーターでしたし、真央は素直で自然体の愛らしい演技をする子。

それってそのまま彼女たちの性格ですよ。人間性が全部スケートに出てるんですね。」

今夜、女子のフリーが行われます。浅田真央選手、笑顔で締めくくってもらいたいですね。



最後に、月刊『致知』2014年3月号 特集「自分の城は自分で守る」より 気になった記事がありましたので紹介させていただきます。

「行き着くところはその人の人格」

越智直正(タビオ会長)



靴下屋  
produced by Tabio

近年、中国産の安い製品が多く占めている靴下市場にあって、メイド・イン・ジャパンにこだわり、若い女性を中心に圧倒的な人気を誇る「靴下屋」ブランド。創業者の越智直正氏はいかにしてゼロから事業を発展させてきたのか。中卒、丁稚出身の叩き上げの経営者が語る「商いの原点」とは——。

※対談のお相手は、メーカーズシャツ鎌倉・貞末良雄会長です。

越智 その人の持っている人格がすべてを規定するんであって、知識とかそういうものは殆ど関係ない。どんな事業でも、最後に決着をつけるものはその人の人格だと思いますよ。

貞末 同感です。

越智 そのことを教えてくれたのは、僕をサンドバッグみたいにして厳しく鍛えてくれた奉公先の大将でした。人間を磨かなかつたらええ商品はできない。おまえがつくれた靴下を靴下と思うな。これはおまえの心を表現したもので、おまえ自身なんだと。

だから優れた人格をいかに養うかということが大事だと思います。



貞末 おっしゃるとおりです。

徳がなければ人はついてきません。だからといって、付け焼き刃でそんなもの身につきませんし、いったんインチキをしたら、それまで築いたものは全部ダメになる。

ですから絶対に自分を裏切らずに積み重ねてきたものの結果として、人様が自分をどう思ってくださるかということですね。

越智 僕は正しい道を歩むこと、相手のことを考えて相手に尽くすことが徳を積むことだと思います。

商売人はそんなに難しいことを考えなくても、それだけ実践していけばいいのと違いますか。

続いては、

「万難を排して必ずやりとげる徹底心」

北尾吉孝(SBIホールディングス社長)

北 康利(作家)

『永遠のゼロ』の著者 百田尚樹氏の作品『海賊と呼ばれた男』のモデルになり、いま再び脚光を浴びている出光佐三。

人間尊重に立脚した経営道を生涯貫き、出光興産を100年企業へと導いた名事業家、出光佐三がいかにして無から有を生み出し、会社



経営という城、自分の人生という城を見事に築き上げていったのか。共に出光佐三の生き方に心酔しているSBIホールディングス社長・北尾吉孝氏と作家・北康利氏の対談記事です。

北尾 彼は人を育てる上で何が大事かということについて「徳」と言っている。事業は一人ではできませんから、自分の人徳を磨き、その人間的魅力で周りからいろんな人を惹きつけ、一致団結する和の力でもて大きなことをやる。そうやって社会を感化していくと。一燈照隅、萬燈照国の世界ですね。

そして今度は、いよいよその感化を世界に広げるべきだとも出光さんはおっしゃっていました。西洋社会の物質文明は行き詰まっている。ここに日本の精神文明、日本人の持っている素晴らしい道徳心を持っていけば世界は救われる。ですから、出光さんの思想はもう企業という範疇を超えられているんですね。

(中略)

北尾 私は自分の城を守る時に大事なことは、まず一つ自分に自信を持てるようになることだと思います。そういう人間になるためにはどうしたらいいのか。やっぱり勉強しないといけない、苦労しないといけないんです。

以前、北先生と出光興産の天坊前会長が『致知』で対談されていた時に、北先生は天坊さんに「出光佐三さんに直接お会いになって、印象はいかがでしたか」と質問されていましたよね。

北 よく覚えていらっしゃる。

北尾 その時、「俺ほど苦労した人間はないという感じだった」って天坊さんがおっしゃったという話がありまして、そう言い切れるくらい苦労し、悩み抜き、考え抜き、その結果としてある種の自信が湧いてくる。

出光さんの言葉に

「青年の處世上最も大切なことは、やりかけた仕事は万難を排して必ずやりとげるという徹底心である」とあります、やはりどんな些細なことでも、自分で決めたことは途中で投げ出さずに、根気よく、粘り強く続けることが必要なではないでしょうか。

先ほども申しましたが、メジャーから石油の供給を止められたことに弱音を吐くのではなく、別のところから買ってくればいいじゃないかと。

こういうふうに次々と、じゃあどうする、じゃあどうする、と発想していかなければそこで終わってしまいます。「発心、決心、相続心」という言葉があるように、一旦自分が決したことはできるまでやり抜いていく気概を持たなきやいかんですね。

北 そうですね。松下幸之助も「自分は失敗したことがない。それは成功するまで続けるからだ」と言っていますが、失敗や逆境に何回も出合い、それを乗り越えていく経験の中から粘り強さや継続心が生まれてくると思うんです。

私が致知出版社から上梓した『日本を創った男たち』の中で、浅野財閥を築き上げた浅野総一郎という人物が出てきます。私は彼の「九転び十起き」という言葉が凄く好きなんですね。

京浜工業地帯も北九州工業地帯も、実は浅野総一郎の埋め立てがなかったらできていなかつたんですけど、どうして渋沢栄一と安田善次郎が彼に出資したのか。

それはいくら転んでも転んでも、立ち上がってくる人物だったからですよ。

そういう人間こそ信じられるということでしょう。

だから「若い時の苦労は買ってでもしろ」というのは至言であって、その中で「俺はこういう人生だったらいいと思う」という自分なりの生き方の核、美学を持つことが大事だと思います。

以上 致知より

---

自ら彊めて息ます。自らを磨いていきましょう。

まだまだ寒い日が続きますが、どうぞくれぐれもご自愛くださいませ。